

地域におけるスポーツイベントの事例研究（1）

—サザン・セト大島少年サッカー大会の開催経緯と現状—

幸田三広*、菱山士朗**、藤岩秀樹***、折本浩一****、平松 携*****、平畑幸作*

The Case Study of the Sport Event in the Community (1)

— The Holding process of the Southern Seto Oshima Junior Soccer Meeting and the Present Condition. —

Mitsuhiro KOTA, Shiro HISHIYAMA, Hideki FUJIIWA,
Koichi ORIMOTO, Sugaru HIRAMATSU and Kosaku HIRAHATA

Abstract

The Southern Seto Oshima Junior Soccer Meeting finished the fifth meeting. As for the community development, which is purpose of the meeting, economical effect could be recognized. But active development of the community could not be distinctly realized. In this paper, I analyze the present condition, and the process which resulted in the holding of this meeting, as basic study to clarify the effect of this meeting on the community. In conclusion, although participants were contented with the meeting, there were the problems of the shortage of staff and cost reduction in management, and the deteriorating of the service would be apprehensive. I concluded that it is necessary to reexamine the management of the meeting which is completely under the control of administrative circle at present, and to close up to system controlled by the community.

Key words: Community, Sport event, Soccer meeting, Holding process, Present condition

1. はじめに

近年、都市部への人口移動は加速化傾向にあり、全国の36%が過疎市町村になってきている¹⁾。過疎化に加えて高齢化も進んでおり、過疎市町村においては高齢化率が上昇している。すでに住民の4人に1人が65才以上の高齢者という超高齢化社会を迎えているところも少なくない。

このような過疎化の進行に歯止めをかけるだけでなく、スポーツを通して地域社会の活性化を図ろうとする地方自治体が増えてきている。かつて地域活性化施策といえば、企業や工場の誘致が中心となっていたが、それらはバブル経済の崩壊によって影を潜めていき、テーマパークや博物館、記念館などの新設による観光や、スポーツイベントによる活性化が注目されるようになってきた²⁾。その裏側には国民体育大会や全国レベルのスポーツイベントが開催地にもたらすインフラ整備や観光客誘致などの社会

経済効果への期待がある。ワールドカップやオリンピックのような大規模なものをはじめ、地方レベルのマラソン大会などにおいても同様の効果が期待されている。地方レベルのスポーツイベントでは国際レベル、全国レベルのような大きな効果は期待できないものの、町の知名度を高め、観光客の増大や住民意識の高揚など、まちおこし、村おこしの一環としてスポーツイベント開催が隆盛を見せている。

かつて、地域活性化のための政策として話題を呼んだ「ふるさと創生一億円事業」においてもイベント開催による地域活性化事業825件のうちスポーツイベントの実施は130件で15.8%にもなった²⁾。近年の生涯スポーツムーブメントも重なって、スポーツイベントは地域のスポーツ振興のみならず、地域活性化への期待も担っていることがわかる。しかしその一方で、イベント数の増加や競合、プログラムの固定化やマンネリ化などによって参加者の伸び

悩みや減少といった事態を招いていることも指摘されている³⁾。

このような背景のもと、1997 (平成9) 年3月から、過疎の進む瀬戸内海の周防大島 (山口県大島郡) において、「サザン・セット大島少年サッカー大会」 (以下「サザン・セット大会」と略称) が開催されている。この大会は、青少年の健全育成や地元大島郡の地域や経済の活性化を第一に毎年3月に開催され、2001 (平成13) 年に第5回大会を終えている。大会参加者の満足度が非常に高いことから⁴⁾、一応の成果をあげており、今後も大会は継続されることが予想される。

そこで本研究では、大島郡におけるスポーツイベントの一つであるサザン・セット大会が大島郡4町に与える効果を解明するための基礎的研究として、大会開催に至った経緯と大会の現状を明らかにし、今後の大会の方向性を示唆する基礎資料を得ることを目的とした。ここでは議事録および会議資料を主要資 (史) 料とした。

2. 大島郡の概要

2.1 位置

屋代島とも周防大島とも呼ばれるこの島は山口県東南部に位置し、瀬戸内海では兵庫県の淡路島、香川県の小豆島に次ぐ面積 (137.96 km²) を持つ。

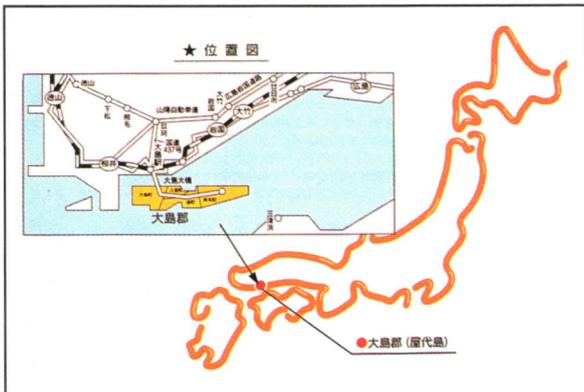


図1. 全国位置図



図2. 大島郡図

大島郡は地図で見ると金魚の形に似ていることから金魚島と呼ぶ人もいる。四つの町からなり、本州の山口に一番近い頭の部分が大島町、背びれが久賀町、腹が橋町、そして四国の愛媛側に最も接近した長い尾びれの部分が東和町である。(図2.)

また、島全体が瀬戸内海国立公園に指定されており、日本三大潮流の一つに数えられる大島瀬戸の上に乗架された大島大橋 (全長 1,020m) によって本土と結ばれている。

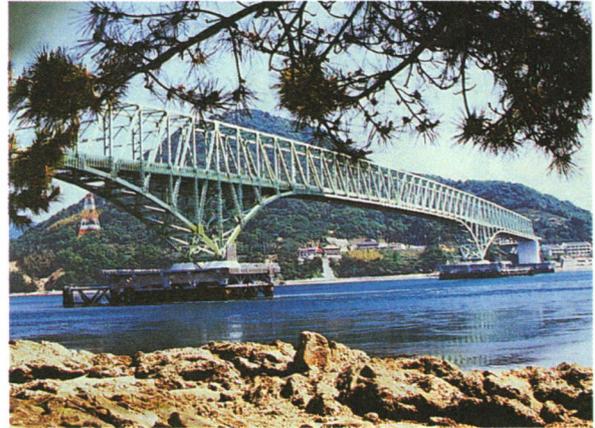


写真1. 大島大橋

2.2 人口と高齢化率

2001 (平成13) 年8月31日調べによる島の人口と年代別割合を表1. に示した。島の人口は大島町 7,439 人、久賀町 4,484 人、橋町 5,972 人、東和町 5,426 人、計 23,321 人となっている。

特筆すべきは、全人口に占める 65 歳以上の人口、いわゆる高齢化率である。大島町 40.50%、久賀町 37.71%、橋町 42.88%、東和町 49.94%、大島郡全体では 42.77% という数字になっている。

2001 (平成13) 年現在、日本全体の高齢化率は 18.0% (総務省調べ) であり、大島郡全体の高齢化率はその 2.4 倍、東和町においては 2.8 倍もあることになる。また、東和町は 1980 (昭和55) 年以来、現在まで 20 年間にわたり高齢化率日本一の座を保っている。

表1. 人口と年代別割合 2001/8/31 調べ

	人口	0~14 歳	15~64 歳	65 歳以上
大島町	7,439 人	7.78%	51.71%	40.50%
久賀町	4,484 人	9.59%	52.70%	37.71%
橋町	5,972 人	8.46%	48.66%	42.88%
東和町	5,426 人	8.27%	41.78%	49.94%
大島郡	23,321 人	8.42%	48.81%	42.77%

2.3 生徒数

平成 13 年度調べによる学校および生徒数を表 2. に示した。大島郡に平成 11 年度まで 16 校あった小学校は少子化の影響で 14 校になった。小学校の平均児童数は 57 人、中学校の平均生徒数は 54 人であった。一学年の平均人数は小学校で 9.5 人と 10 人に満たない。中学校では 18 人であった。

次に高校生年代を見ると、普通高校 506 人と高専 (5 年制) の 3 年生まで 365 人を合わせると 871 人となり、中学校の生徒数 486 人に比べて 385 人多い。単純に比較は出来ないが、高校生年代の生徒の半数近くが大島郡外出身者であることが予想できる。とくに大島商船高専においては、大島郡内出身者が全体の 1 割に満たず、ほとんどの学生が大島郡外出身者である。

表 2. 学校及び生徒数 (人) 2001 (平成 13) 年度調べ

	大島町	久賀町	橋 町	東和町	計
小学校 (14 校)	三蒲 45 屋代 30 明新 112 沖浦 39	久賀 145 棕野 26	島中 45 浮島 14 安下庄 155	油田 41 情島 15 和田 21 森野 39 城山 71	798
中学校 (9 校)	蒲野 24 大島 110 沖浦 24	久賀 112	日良居 37 安下庄 76	油田 21 情島 7 東和 75	486
高校 (3 校)	田布施農 業大島分 校 82	久賀 212	安下庄 212		506
高専 (1 校)	大島商船 609				609
専修学校 (1 校)	大島看護 専門学校 107				107
計	1,182	495	539	290	2,506

2.4 体育行事

大島郡内では一年を通じスポーツイベントが盛んに開催されており、大島郡体育協会が主催する大会だけでも 14 を数える。(表 3.)

これら郡体協主催の大会の多くは 1 年ごとに 4 町持ち回りで開催されている。このほかに各町主催の体育行事や各競技団体が主催する大会などがある。

表 3. 平成 13 年度大島郡体育協会主催体育行事

	大 会 名 (開催地)
5 月	大島郡壮年野球大会 (東和町)
6 月	大島郡ソフトボール大会 (大島町) 大島郡バレーボール大会 (橋町) 大島郡陸上競技大会 (東和町)
7 月	大島郡壮年ソフトボール大会 (大島町) 大島郡スポーツ少年団交歓大会 (久賀・橋町)
8 月	大島郡水泳大会 (大島町) 大島郡ソフトテニス大会 (久賀町) 大島郡卓球大会 (橋町)
11 月	大島郡フットサル大会 (東和町)
12 月	大島一周駅伝競走大会 (久賀町)
2 月	サザン・セット大島ロードレース大会 (東和町)
3 月	大島郡軟式野球大会 (久賀町) サザン・セット大島少年サッカー大会 (大島郡 4 町)

3. 大会開催までの経緯

1993 (平成 5) 年： 第 1 回大会が開催される約 4 年前、東和町の陸上競技場建設計画に伴い、施設に関する運営委員会が地元陸上競技役員や学識経験者などにより開かれていた。その席上では施設利用率を上げるための方策が検討されており、運営委員の一人からあるスポーツイベントが提案された。これが瀬戸内海を中心とした全国規模の少年サッカー大会、後のサザン・セット大会であった。

1993 年当時、世間ではまさにこの年開幕した J リーグによるサッカーブームが巻き起こっていた。また日本代表の活躍も目覚ましく、翌 1994 年にアメリカで開催されるワールドカップ大会への初出場に向け国民の期待も大きく膨らみ、スポーツ新聞は連日サッカー関連の話題を取り上げていた。

サザン・セット大会を提案した委員は、こうした時代の流れを背景に「少年サッカー大会を開催することで施設の利用率を上げることができ、参加チームが数日間滞在すれば町の活性化にもつながる」と説明した。つまり町の活性化のためには、少年サッカー大会を開催することが最も効果的であったとしたのであった。さらに、「大島郡全体を会場にして 4 町で開催できるならば、大会規模も拡大できより多くの人が大島を訪れることになる」と加え、大島郡全体の活性化を視野に入れた 4 町が一体となった大会の検討がなされた。その後、東和町長から 3 町の町長に提案されることとなる。

1994 (平成 6) 年 12 月： 組織づくりのための準備委員会が結成され第 1 回の会議が開催された。委員は大島郡 4 町の教育委員会 (社会教育課) から 2

名と企画課から1名の合計12名であった。準備委員会では「開催日」、「大会名」、「大会趣旨」、「チーム数」、「運営方法」、「運営費」、「事務局」について話し合わせ、計4回の会議で「開催日」と「大会名」それに「事務局」が決定された。その間、会場となるグラウンドの調査が4町すべての学校・体育施設で行われた。また宿泊施設の数と収容人数、宿泊料金の調査も行われた。

サザン・セット大会の特徴としては、まず大島郡では初の3日間の開催という点であろう。表3.で記したように、大島郡体育協会主催の体育行事はサザン・セット大会を除くと年間13を数える。しかし、そのどれもが一日だけの開催でしかも引き受け町がすべてを運営している。3日間も同じ大会を運営することは過去にも例がなかったのである。

そしてさらに大きな特徴と言えるのが4つの町が共同開催することであろう。複数の自治体が共同でイベントを開催することは全国でもあまり例を見ないことであった。4町共同開催という点からして、大会会長の選出、事務局の設置場所、大会予算などあらゆることで4町すべてに連絡をとり伺いを立てなければならない。その調整には困難を極めたようであった。これは単独で実施する場合に比べ単純に4倍の労力を要するうえ、昔ながらの対抗意識と4町それぞれに大会に対する考えの違いがあり協議は思うようには進まなかった。こうしたことから4町が足並みを揃えることが大会開催へ向けた重要なカギとなった。

1995(平成7)年3月: 4町での調整を諮った結果、大島郡4町の町長が集まる町長会の席で、ついにサザン・セット大会の開催が決定される運びとなった。同年5月には大島郡体育協会役員総会にて開催を承認され、大島郡体育協会主催行事の一つとなった。

しかし、サザン・セット大会の開催は決定したものの4町に大会運営のノウハウは全くなく、サッカーの土壌もほとんど無かったのである。

そこでサザン・セット大会の提案者は、サッカー先進地で少年サッカー大会の成功例である「清水カップ全国少年少女草サッカー大会(以下、清水カップとする)」の大会運営に携わっていた清水市企画調整課サッカーのまち推進室副参事で現日本サッカー協会理事の綾部美知枝氏に少年サッカー大会開催における大会運営面でのアドバイスを求めた。

さらに大会提案者は、町からの要請を請けて東京からサッカーの指導者を体育業務援助員(町臨時職員)という形で派遣し、スポーツ少年団を中心にサッカーの普及に力を入れた。

1995(平成7)年8月: 準備委員会のメンバー12名と体育業務援助員として迎えたサッカーの指導者を加えた13名が少年サッカー大会の先進地である静岡県清水市を訪れ、清水カップの実際の運営方法を学び、現場の雰囲気を感じ視察が行われた。また施設面では、清水エスパルスのホームグラウンドであり大会の決勝戦が行われる日本平運動公園球技場の施設見学も行われた。翌1996(平成8)年には2度目の視察にも訪れている。

1995(平成7)年9月: 4町の体育担当者と大会提案者を含めた「企画委員会」を立ち上げると、清水カップの運営マニュアルをもとに大会の柱となる「競技運営部会」、「式典部会」、「宿泊輸送部会」における運営スタッフの役割分担について協議されることとなった。第1回大会までの約2年弱の間に計13回もの企画委員会が開催され、予算や役員、後援・協力団体など、大会運営に関する細かな点について検討された。

1996(平成8)年11月: 当初、初めての大会で知名度が無く参加申込みが少ないと予想されていたこともあり、企画委員会のメンバーで山口県サッカー協会はもちろんのこと、中国、四国、九州地区の各サッカー協会を訪れ参加協力をお願いに回っている。特に山口県サッカー協会からは全面的な協力を取り付けることができた。

その結果、12月の締め切り時点では当初の予想に反し、48チームの募集に対して99チームの申し込みがあった。山口県内では46チーム、県外では53チームもの応募があった。表4.には第5回大会までの参加申込チーム数を示している。

表4. 参加48チームに対する県内外の申込数

	県内	県外				計
		中国	四国	九州	他	
第1回	46	20	17	8	8	99
第2回	36	12	8	5	4	65
第3回	35	14	7	3	4	63
第4回	28	11	6	1	4	50
第5回	31	14	5	1	3	54

4. 大会の現状

10年続いたスポーツイベントを成功とするなら、15回を数える清水カップはまさにスポーツイベントの成功例である。その清水カップを手本に開催されたサザン・セット大会も第5回大会を終え、成功への折り返し地点にあると言えよう。表5.は清水カップとサザン・セット大会の比較を示したものである。

表 5. 大会規模の比較

	サザン・セト大会	清水カップ
開催地	大島町、久賀町、 橋町、東和町	清水市
大会回数 (2001 現)	第 5 回	第 15 回
開催時期	3 月末春休み	8 月末夏休み
開催日数	3 日間	5 日間
参加チーム数	48 チーム	280 チーム
参加者数	約 1,000 人	約 5,000 人
登録人数	選手 18、監督者 3	選手 18、監督者 3
会場数	8 会場	17 会場
コート数	12 コート	34 コート
1 チームの試合数	7 試合	5~9 試合
全試合数	168 試合	1,100 試合
ボランティア人数	のべ約 200 人	のべ約 1 万人
大会参加費用	1 チーム 6,000 円	1 人 700 円
1 日の滞在費 (1 泊 3 食)	6,000 円	7,300 円
大会関係予算 (選手滞在費含む)	2,500 万円	1 億 6,000 万円

サザン・セト大会の良い面での主な特徴は、①瀬戸内海を中心とした全国からチームが参加すること。②全国トップレベルのチームが参加していること。③第 4 回大会では中国の上海からチームを招待し国境を越えた交流ができたこと。④山口県東部地域ではこういった大会がないこと。⑤年度末での開催のため 6 年生最後のお別れ大会になること。⑥大島郡の豊かな自然のなかで試合ができること。⑦宿泊施設の親切な対応や宿から会場までの送迎バスなどのサービスが行き届いていること。等が挙げられる。

中でもサザン・セト大会の最大の目玉とも言えるのは、“清水フットボールクラブ (以下清水 FC)” が大会に参加することであろう。清水 FC といえば、全国大会で数々の優勝経験を持つ日本で最も有名なサッカークラブであり、Jリーグ清水エスパルスの母体となったクラブでもある。参加チームの多くはそんな全国トップクラスのチーム“清水 FC”との対戦に胸膨らませている。

そんな清水 FC をかつて監督として率い、清水エスパルスで活躍した長谷川・堀池・大榎をはじめ多くの Jリーガーを教え子に持つのが前述した清水市の綾部美知枝氏であった。綾部氏は、サザン・セト大会を企画した当初に幾度となく大島を訪れ、大会運営に関する行政へのアドバイスや地域住民への講演会を行い、サッカーを通じた町づくりを提案している。そして大会に特徴をもたせるため、綾部氏の推薦で清水 FC の参加が実現したのである。



写真 2. 清水 FC

折本ら⁴⁾は、第 3 回大会 (1999) を終えたサザン・セト大会参加チームの指導者への調査から、大会に対する参加者の満足度が高いことで、行政主導でスタートしたこのスポーツイベントを一応の成功と捉えた。また今後は地域が中心となって企画・運営し、それを行政がバックアップするといった地域主導型の大会にしていくことが望ましいと提言している。

しかしながら、第 5 回大会を終えた現在も行政主導での大会運営に変わりはない。

折本ら⁴⁾のアンケートによると、指導者は大会全体としては満足をしているものの、「開催時期」、「監督者交流会」、「選手交流会」、「審判」に不満の割合が高い。

不満の理由を考えてみると、「開催時期」では意図的に 3 月 28・29・30 日で固定されていたために第 4 回大会ではすべて平日の開催となってしまった。主催者側では春休み中で選手にはさほど影響はないと見ていたが、チーム指導者や保護者からすれば年度末の平日に 3 日間も仕事を休むことは非常に困難な状態であった。これが大きな要因となり第 4 回大会の参加申し込み数が激減した。これは参加者の大会開催日に対する不満の表れであり、こうした経験から第 5 回大会では曜日を優先し、週末を含めた開催日に変更し対応を図った。「監督者交流会」は大会前夜に行われるため、前泊するチームでなければ参加は難しい。また、大会 2 日目に各町ごとに催される「選手交流会」では 4 町それぞれに趣向を凝らしているが、内容のマンネリ化が危惧される。そして「審判」に対する不満としては、第 2 回大会より実施している相互審判制 (主審のみ) に対するものが大きいようである。第 1 回大会では、主催者側すべての審判員を準備したが、スタッフ不足と大会経費の削減により第 2 回大会よりチームに主審の帯同を義務付けるようになった。これは引率指導者の負担を増加させてしまう結果となり、参加者へのサービスと参加意欲の低下を引き起こしていると考えられ、何らかの改善策が必要であろう。

5. まとめ

サッカーブームの中で始まったサザン・セト大会は、全国でも珍しい4つの町が一体となって開催するスポーツイベントである。インターハイの複数県開催や2002年サッカーワールドカップの日韓共催にも見られるように、近年、国や自治体を越えた協力関係の動きが見られる。10年先行く清水カップを手本によく第5回大会を終えたサザン・セト大会は、全国最大規模の清水カップとは規模こそ違うが、大会開催の経緯から見ても兄弟のような大会である。また、清水FCの参加を目玉とした大会の様々な要素が特徴となり、参加者の満足を得る結果につながっている。

これらのことからサザン・セト大会は、スポーツイベントとしての成功へと向かっているようである。しかし本来、島の活性化を目指したその効果については現在のところ明らかではない。

ただ目に見える効果として、社会人サッカークラブの結成、大島郡サッカー協会の設立、大島郡フットサル大会の開催、審判員の育成などの動きが見られる。

これらの点については、事例研究(2)で検討する。

本研究の一部は日本体育学会第52回大会(2001.9)において発表した。

文献

- [1] 山口泰雄：地域社会の活性化とスポーツクラブ、スポーツと健康 30 (12)、1998.
- [2] 山口泰雄：スポーツイベントの現状と参加者の視点、みんなのスポーツ 153、1992.
- [3] 北村、川西ら：生涯スポーツイベント参加者の大会満足度—菜の花マラソン参加者のスポーツライフスタイルによる比較—、鹿屋体育大学研究紀要、第22号、2000.
- [4] 折本、幸田、谷岡、田口、富永：生涯スポーツ時代におけるスポーツ指導者の意識—少年サッカー大会のあり方を中心に—、広島体育学研究、第26巻、2000.
- [5] 野川、菊池、山口、長ヶ原：スポーツイベントのマネジメントに関する研究(1)—イベント参加者の視点から—、鹿屋体育大学研究紀要、第6号、1991.
- [6] 菊池、野川、山口、長ヶ原：スポーツイベントのマネジメントに関する研究(3)—地域活性化の視点から—、鹿屋体育大学研究紀要、第6号、1991.
- [7] 萩、野川、柳、國本：生涯スポーツイベントのマネジメントに関する研究(1)—県レベルイベントの運営評価—、鹿屋体育大学研究紀要、第10号、1993.
- [8] 野川、萩、國本、松本：生涯スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2)—イベントの運営評価と継続意欲の関連について—、鹿屋体育大学研究紀要、第10号、1993.
- [9] サザン・セト大島少年サッカー大会事務局：サザン・セト大島少年サッカー大会準備委員会議事録及び会議資料、1997.
- [10] 周防大島高齢者モデル居住圏構想推進協議会事務局編：周防大島ガイドブック、2000.
- [11] 佐野眞一：大往生の島、文藝春秋、1997.
- [12] 清水カップ全国少年草サッカー大会10周年記念誌編集委員会編：清水カップ全国少年草サッカー大会10周年記念誌、1997.
- [13] 保健体育審議会(答申)：生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について、1997.